

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520139

研究課題名(和文)野川流の地歌三味線についての研究

研究課題名(英文)Research on Nogawa-style "Jiuta" Shamisen

## 研究代表者

長谷川 慎(MAKOTO, HASEGAWA)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：00466971

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：野川流地歌三味線についての研究。大阪を中心に伝承されている地歌・野川流でかつて使用された三味線の特徴を明らかにした。この研究は 文献に見る野川流地歌三味線の特徴を整理 古楽器の現物調査の実施 昭和初めまでに録音された当時の音源の収集と分析 古楽器の復原を通じてその独特な音色が水張りという皮張りによるものであることを突き止め 復原演奏を行ったものである。まとめとして復原楽器の倍音特性を調べることで現在の地歌三味線との違いを科学的に証明し、水張りが廃れた理由、改良の経緯が義太夫三味線との関連にあることを指摘し、野川流地歌三味線に見られる外観的な特徴は義太夫三味線の影響をうけた事を結論付けた。

研究成果の概要(英文)：This research illustrates the special characteristics of the Nogawa-style "Jiuta" shamisen, a style traditionally from Osaka. This research involved (1) collecting the characteristics of the Nogawa-style shamisen seen in literature, (2) examining actual period instruments, (3) collecting and analyzing audio recordings up to the start of the Showa period, (4) determining, via restoration of period instruments, that the style's unique sound quality is produced by the "Mizubari" skinning method, and (5) performing with restored instruments. In summary, examining the harmonic characteristics of restored instruments provided scientific evidence of differences with today's "Jiuta" shamisen. Furthermore, the reason the "Mizubari" skinning became obsolete and the history of improvement identified a connection with the "Gidayu" shamisen, leading to the conclusion that the physical appearance of the Nogawa-style "Jiuta" shamisen were influenced by the "Gidayu" shamisen.

研究分野：音楽教育学、地歌箏曲

キーワード：地歌 三味線 野川流 水張り 皮張り 古楽器 日本音楽

## 1. 研究開始当初の背景 <伝承系統による相違>

今日三味線は細棹、中棹、太棹の3種類に分類されており地歌で用いられる三味線はその中で中棹とされている。地歌は江戸時代に発生し、京都・大阪を中心に発達した家庭音楽である。最も古い三味線音楽である三味線組歌は地歌演奏家によって伝承され、その伝承により野川流と柳川流とにわかれている。野川流は大阪を中心に伝承され、18世紀終わりから19世紀初頭に大阪で活躍した津山検校慶之一は、三味線についての楽器改良を行った。改良の目的は音量の増大と推測する。具体的な改良点は、撥について当時一般的だったと思われる現在の柳川三味線に用いられている撥を大型し撥先を2寸から3寸へと広げ持ち手を厚くし撥先近くで急に薄くなる形状とした。これは今日通称津山撥と呼ばれている。津山検校は撥を大型化しただけでなく、駒や三味線本体についても大型化したと考えられているが明確な資料は残っていない。

1842年(天保13)に高濃東州が著した『三絃独稽古』は地歌三絃入門楽譜集であるが、その中のさし絵に2種の三味線が紹介されている。一つは「歌三味線」でありもう一つは「上り三味線」である。さらに当時の三味線の形状を示して「歌三味線の棹はほそく、ひの棹のふときを是とす」の記述がある。ここから推測できることは、19世紀半ば頃の三味線は現代のように棹幅の分類による3種類の三味線が存在していたのではなく、細いもの(歌三味線)と太いもの(浄瑠璃三味線)の2種だけであったと思われる。京都に伝承された柳川三味線が今日まで三味線はもちろん駒や撥まで江戸期のそのままの形であるのに対して、野川流の三味線は上述のように津山検校による撥の改良と三味線および駒の改良が行われている。

<明治以降の地歌三味線の改良>

ところで地歌三味線は、明治以降、九州地方の柳川流系の演奏家によって改良が行われている。光瀬之都は当時強くなった皮張りに対処するため駒に鉛を入れる工夫をおこなった先駆者である。また長谷検校は、今日九州三味線と呼ばれる地歌三味線の考案者である。長谷検校は義太夫節を愛好し二世豊澤団平(1828-1898)の演奏を聴いたことをきっかけに地歌三味線の改良を手掛けるようになり、19世紀の終わり頃から大型化されていった。

一方、野川流の伝承地である大阪では地歌演奏家・富崎春昇が1917年(大正6)に長谷検校の演奏を聴きその特徴ある棹の形状、鉛入りの駒、大型化した津山撥、胴にヒントを得、三味線製作者植村小七に依頼し独自の改良を行った。富崎は翌年からこの改良した九州型の三味線を用いて演奏活動を行っている(藤田俊一『富崎春昇芸談』1968日本音楽社)。富崎の用いた楽器は吉川英史によって記録(吉川英史『現行三味線調査』、「東洋音楽研究」第14・15合併号、東洋音楽学会、1958)が残されており、また稽古で用いていた三味線は早稲田大学坪内逍遙記念演劇博物館に収蔵されている。富崎は上述の芸談の中で当時の大阪の演奏家の様子を「批判はあった」と述べているが、これは言葉を返せば当時の大阪の野川流演奏家が使用していた楽器は現在の地歌三味線よりも小振りであったといえるであろう。

## 2. 研究の目的

本研究の中心となるのは、富崎春昇の改良以前に大阪の野川流演奏家が使用していた地歌三味線(撥、駒、皮を含む)がどういう形状のものであったかを調査し実態を明らかにすることである。上述のように、現在の柳川三味線がほとんど江戸期から変わっていないのに対して、野川流の三味線は九州型三味線の影響を受けその姿を消してしまった。

<研究対象となる三味線>

今回の研究の対象としたのは、津山検校改良から富崎春昇改良に至るまでの間に大阪を中心とした野川流地歌演奏家に用いられていた地歌三味線である。

### 3. 研究の方法

本研究は以下の計画によって行った。

①フィールドワークによって対象となる時代の三味線（三味線・駒・撥・皮・糸）の収集と採寸

②三味線についての文献調査

③演奏家への聞き取りによる情報収集

④収集した楽器の復原

⑤演奏家に協力を依頼し、当時使用されていたものと同等の駒、撥を使用して復原演奏

⑥音色について演奏家による評価を受ける

⑦三味線製作者への聞き取り調査

⑧録音に残る野川流三味線の音色についての調査。昭和初期以前の SP 盤等に残っている録音を中心に調査し、かつての野川流三味線による演奏から野川流の音色についての音色を定義

⑨成果発表会の実施

⑩東洋音楽学会での研究発表

<調査の対象>

- ・三味線製作者
- ・演奏家（80才以上の高齢演奏家）
- ・演奏家（現在演奏活動を行っている地歌演奏家）

- ・博物館

- ・物故演奏家の遺族、高弟

<調査エリア>

- ・大阪（市内の三味線製作者、野川流地歌演奏家／菊津木昭師、菊原光治師等）

- ・京都（柳川流地歌演奏家／中澤真佐師他、市内楽器店）

### 4. 研究成果

古楽器の収集、現物調査による採寸を通じて判明した野川地歌三味線の特徴を以下にまとめる。

#### 1) 野川流地歌三味線の特徴

外観（全長 9800mm）

#### ○棹部

①乳袋の膨らみがまっすぐに近い（写真1）

野川流地歌三味線と九州型地歌三味線（現行地歌三味線）との比較表

	全長と 棹幅 (cm)	棹の断面	棹の胴 寄の 下端	胴	撥	駒	皮の張り方 ・ 皮の厚さ
野川流 地歌 三味線	97 ・ 2.2	U字	なだらか (長頸型)	5厘大 ～ 1分5厘大 (様々有)	津山 ハチ	台広駒 (くり抜き無) 3.9～5.6g 等の幅広い重さ	水張り ・ 薄い皮
九州型 地歌 三味線	100 ・ 2.7	U字 ・ 義太夫型	延長し 鋭角	1分5厘大 ・ 2分大	九州 ハチ	鉛入り (金・銀も有) 4.1g～4.9g (1羽1分～1羽3分)	乾張り ・ 厚い皮

（写真1）天神部分と乳袋の形状



②下棹の下端は鳩胸形状（写真2）

→他の多くの種類の三味線に共通

（写真2）棹の下端と胴の形状



③棹幅乳袋下で 22.5～23mm 前後

→昭和初期の九州型に改造されたものは 24mm 超

④朱の入りもあるが多くは漆仕上げのみ

⑤重ねの形状は「U」字型

⑥糸蔵の幅が狭く厚みがある

- ⑦天神は太棹のようにムクリがつよい
- ⑧棹材は紫檀と紅木が多く見られるが、現在「紅木」とする材とは異なる木地  
→派手なトチ模様は見られない
- ⑨糸巻の芯座に凝った細工（象嵌・彫金・銀）のものが見られる

→特に紅木材の棹の場合は銀製や象嵌が施されている

- ⑩ほぞは平ほぞ。金や銀ほぞ仕上げはない
- ⑪猿尾の形状は平
- ⑫現在主流とは異なり上駒から糸巻への糸の巻き込み角度が急である

→細い糸の場合上駒で切れやすい

- ⑬糸巻き素材は象牙製が見られる

○胴部

- ①胴のムクリが高い。
- ②現行の義太夫三味線および津軽三味線に見られる「リンドウ」がある。
- ③リンドウには金属の飾りや象嵌などの細工がされている。その意匠は糸巻の芯座の意匠と揃えられていることが多い。
- ④大正期以前に製作された三味線には、胴の外側に漆の下に「朱」が木の目地に刷り込まれている。
- ⑤サイズはまちまちであり長唄胴のサイズ～1分5厘大まで様々存在する
- ⑥彫りは今日一般的なる「丸打ち」（普及品）、「綾杉」（中級品）、「子持綾杉」（高級品）はなく、鋸跡状の縦筋が8～9本入っているが多く見られる。（写真3）

（写真3） 胴内部



- ⑦胴板の厚みが 10mm～13.7mm であり現在と比べて薄い

→現行の地歌は 17.7mm～18.8mm 前後

- ⑧現在主流とは異なり上駒から糸巻への糸の巻き込み角度が急である

→細い糸の場合上駒で切れやすい

- ⑨糸巻の芯座に凝った細工（象嵌・彫金・銀）のものが見られる

→特に紅木材の棹の場合は銀製や象嵌が施されている事が多い。

○撥

- ①撥先が狭く丈が長い津山撥（写真4）

→持つところから撥先への勾配がなだらか（写真4）津山撥

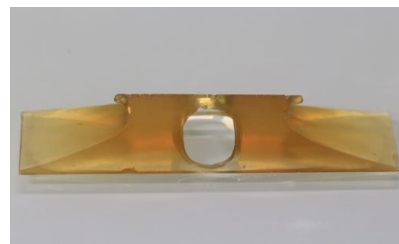


- ②材は象牙、黒水牛台の先鼈甲
- ③撥の先端幅は3寸4分（103mm）前後
- ④撥の丈は7寸5分（227mm）前後
- ⑤才尻は正方形ではなく縦長

○駒

- ①台広駒（写真5）

→長さ、幅、高さは柳川台広と一致（写真5）台広駒（白水牛）



- ②材は黒水牛、白水牛、象牙
- ③高さは4分（12mm）前後
- ④重さはまちまちである（調査では多くは4g～5.3g）→富崎春昇の口述と一致
- ⑤裏側にクリがない→柳川より重くなる
- ⑥棹の幅に比べて糸道が広めである

○皮

- ①六ツ乳や八ツ乳などの薄い皮
- ②金栓水張りによる皮張り

○糸（弦）

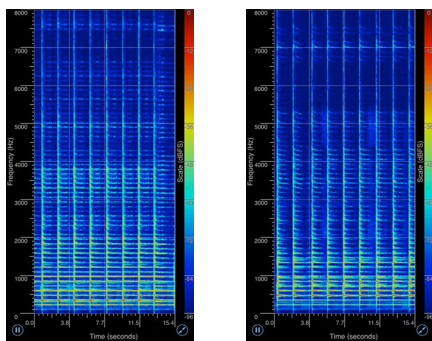
- ①演奏家の証言からは第1弦が16 匁など現

行より重い（太目）ものであったという。

## 2) 水張りによる皮張り

富崎春昇によると、自身の修業時代は「昔はそれを二分ないし五分間くらい水につけて、水揚げをしてから張ったもので、それも上方では金栓だったのですが、いまではいずれもらくだからというので木栓になって、皮もちかごろのは、水につけるといふことはしなくなりました。」と皮張りが水張りと呼ばれるやり方で行われていたと回想している。そこで現在も水張りを行っている京都・今井三絃店に依頼し、収集した野川流地歌三味線を復原した。写真7は水張りとは乾張りで張られた野川流地歌三味線の倍音を Spectrum View (ios8) 計測で測定したものである（駒は同一のものを使用）。

(写真7) 三味線 A (左) と三味線 B (右)



三味線 A：水張り。楯繁一栄使用。大正期。

三味線 B：乾張り。菊島琴松使用。明治期頃

### ○倍音の波形からの考察

①第1弦開放弦の比較で、乾張りの三味線は5400Hz～6600Hz 付近の倍音が薄くなっているが水張りの三味線は高次倍音まで綺麗にでている

②横線の幅と長さは減衰音の強さと長さを示しているが、水張りの三味線は太く長い

③乾張りがある間隔を置いて強い倍音が出るのに対し水張りは間隔を置くことなく高次倍音まででている

### ○水張りの廃れた理由

①職人の変化（作業効率の悪さ）

乾張り→

- ・皮を布で湿らせて作業する

・張りながら張り上がりの強さを指で叩いて想像可能

・最初から湿っている程度なので乾燥時間が短い

水張り→

・水を張った手桶に皮を数分間つけて皮によく水を浸透させる

・濡れているため張りながら強さが確認できない。張り上がりの強さを想像できないことから相当な勘が必要。

・演奏家の求める強さに応える事が難しい。

## ②大阪の地歌演奏家の音色の好みの変化

(倍音が多い独特の響き)

乾張りは倍音が少ないすっきりとした音が得られる。

水張りは倍音が多いかつての「上方」の音色であり、九州系演奏家の大阪進出（稽古場設置）により、大阪でも東京の音が聴けるようになったことにより江戸好みの音色への好みの変化が起きた。なお、文楽三味線および祇園地歌三味線（柳川三味線）は今も今井三絃店の水張りが行われている。大阪市・植村楽器店への聞き取りで、大阪の文楽が京都の楽器店で張る理由の一つに、地元大阪での水張りができる職人がいなくなったことを挙げていた。

## 3) 柳川三味線から野川流地歌三味線への改良の理由

### ①音量の拡大

柳川三味線は楽器も華奢であり、皮は緩く対応した駒は3g前後と軽く、撥は簡単にしなるほどしなやかで軽量である。この撥で演奏してみると絶対的な音量は大きく出せない。撥のしなりを利用して弾く（従来「練り撥」といわれている）演奏法ゆえに音量よりも響きを重視する三味線であるからである。

津山検校慶之一は、その楽器に改良を加えたとされる。つまり19世紀初頭頃には大阪野川流でも柳川三味線が一般的であったことが想像できよう。改良のきっかけは不明で

あるものの、さらなる音量の拡大を目指したことは想像出来る。

そこで参考としたのは、義太夫節に用いられる浄瑠璃三味線（＝太棹）と考えられる。調査を行った江戸期の太棹三味線（今日義太夫演奏に用いられる撥と駒が付属しており、浄瑠璃に用いられていたと考えられる。製作者は墨書きから大坂の職人と推測される。）の法量は、野川流地歌三味線に比べるとやや大きい。撥についても全体は大型であるものの、先幅は3寸2分（98mm）であり、偶然の一致か、津山撥に近い。柳川三味線の撥先幅は先に示したものは2寸1分（64.9mm）であるがこれよりさらに狭く小型なものも存在。

駒についても、長さ、幅、高さ、素材ともに共通点が見られるが、決定的に異なるのは重さである。裏側をくりぬいて薄くした柳川台広駒が2.8g程度に対して、津山撥に合わせられる台広駒（以下野川台広駒）はばらつきがあるが多くは4.5g前後、中には5.6gのものもある。文化9年の浄瑠璃三味線に付属の駒には現行の鉛入義太夫駒に似た形状をしたものの他に、鉛がなく、背の低い（4分）のものがある。その形状は野川台広駒とほぼ同じである。古道具ゆえに他の駒が混入した可能性も考えられるが、駒裏の削り方の特徴、三味線に「山田屋」とあり、鉛入駒に「山」の意匠が彫り込まれていることから元々のものとも考えられる。文化9年には既に野川台広駒が存在したのかは断定できないが、津山検校が柳川台広から重くするために「中ぐり」をやめたと考えるのが妥当である。

皮については、柳川三味線の皮は透けるほど薄く、張り方は軽く皮面を押しただけで凹むほど緩いが、それに合わせるために軽い駒が使用される。極限まで黒水牛を削り込む技術と素材が現在はないため軽い駒は珍重されるが、それほど軽さを必要とする皮張りの張り方（＝緩い）でもある。

駒を重量化は、皮の厚みや張り方も変更が

必須である。富崎春昇の記述に「ボコボコ」などの表現があるのは皮の緩さからくる音色と、駒の重さが皮に合っていない時に起こる鳴りを表現していると思われる。

## ②浄瑠璃三味線を参考に柳川三味線を拡大

音量の拡大には撥と駒と皮だけでは対応できなかったと考えられる。胴を大きくし、それに対応した棹へと大型化したと考えるのが妥当である。

野川流地歌三味線の糸蔵はその中間の厚みを持ち、海老尾は浄瑠璃三味線同様ムクリが大きくやや厚く、乳袋は直線的である。また、棹の重ねの形状も柳川三味線は「V」字が多く、一方浄瑠璃三味線は下ぶくれになっておりこれを指して「義太夫型」ともよばれる。対して野川流地歌三味線は「U」字である。これらのことから、今後調査を継続する必要はあるが、現時点では津山検校は大型化するにあたり柳川三味線と浄瑠璃三味線の中間をとったのではないかと結論づける。

## 4) まとめ

今回の研究で大阪の地歌の流儀である野川流で江戸時代後期から昭和前期まで使われていた三味線の特徴が明らかとなった。調査をした三味線の法量はばらつきがあるものの4の1)で述べた特徴を持つ。加えて楽器の復原を通じて当時の音色を再現するには「水張り」による皮張りが不可欠であり、演奏法も独特であることが明らかとなった。今後は「野川三味線」と称し演奏の普及を図りたいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

学会発表：長谷川慎

タイトル「野川流地歌三味線についての研究」、東洋音楽学会東日本支部第85回例会、東京芸術大学（東京都台東区）、平成27年5月2日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

長谷川 慎 (HASEGAWA MAKOTO)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：00466971